

「語源の話」

群馬県立女子大学教授 北川和秀

・語源に対する関心

1. 地名起源説話

(日本武尊) 碓日坂に逮ります。時に日本武尊、毎に弟橘媛を顧びたまふ情有ります。故、碓日嶺に登りて、東南を望りて三たび歎きて曰はく、「吾嬬はや」とのたまふ。故因りて山の東の諸国を号けて、吾嬬国と曰ふ。

(日本書紀景行四〇年是歳)

(倭建命) 足柄の坂本に到り、御糧食す処に、其の坂の神白き鹿に化りて来立ちぬ。尔して、即ち其の昨ひ遺したまへる蒜の片端以ちて待ち打ちたまへば、其の目に中りて乃ち打ち殺したまひき。故、其の坂に登り立ち、三たび歎かして、「あづまはや」と詔云らしき。故、其の国を号けて阿豆麻と謂ふ。

(古事記中・景行)

* 碓氷坂・足柄坂の東 坂東 碓氷関・足柄関の東 関東

2. 落語

「やかん」

「千早振る」

・千早振る神代もきかず龍田川からくれなゐに水くくるとは

・さまざまな語源(個別的なもの)

1. 地名に由来するもの カステラ(スペインのカスティーリャ地方)、ポートワイン(ポルトガルのポルト港)
2. 人名に由来するもの 備長炭(元禄時代の備後屋長右衛門)、サンドイッチ(イギリスのサンドイッチ伯爵)
3. 企業名に由来するもの ドーラン(ドイツのドーラン社)、バリカン(フランスのバリカン・エ・マール社)
4. 商品名に由来するもの チャック(広島日本開閉機会社が「巾着」をもじって付けた商標名)
5. 特定分野の語が一般的な用法に転じた例

歌舞伎...おはこ、正念場、長丁場、二枚目、花道、檜舞台、大詰め、黒幕

相撲.....勇み足、痛み分け、肩透かし、黒星、仕切り直し

囲碁.....一目置く、傍目八目、定石、捨て石、駄目、駄目押し、布石

将棋.....王手、終盤、高飛車、成金

・語源を考える

* なぜ語源は分からなくなるのか

時を経て語の形が変わるから } できるだけ古い時代にさかのぼって
時を経て語の意味が変わるから } そこからの変化をたどることが必要

* 語源を考えることは、ことばの歴史を深く知ることにつながる

1. 導入1 (やさし、うつくし、こ、ねこ)

^{よのなか}世間を憂^うしとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば

(万葉集 巻5 - 893 山上憶良)

* 「やさし」は、動詞「瘦す」と語源を同じくする形容詞。身も細るようだ。

肩身が狭い 遠慮がちで控えめだ → 優美だ、思いやりがある
→ 平易だ

父母を 見れば尊し 妻^め子^こ見れば めぐしうつくし 世の中は かくぞ道理^{ことわり}

(万葉集 巻5 - 800 山上憶良)

うつくしきもの 瓜にかきたるちごの顔。雀の子の、ねず鳴きするにをどり来る。二つ三つばかりなるちごの、いそぎてはひ来る道に、いとちひさき塵のありけるを目ざとに見つけて、いとをかしげなるおよびにとらへて、大人などに見せたる、いとうつくし。……^{ひひな}雛の調度。……なにもなにも、ちひさきものはみなうつくし。…… (枕草子154段)

* 「うつくし」は、かわいく思うこと。いとしく思うこと。平安時代には小さいものをかわいいと思う気持ち。

「こ」さまざま

a 海鼠(なま^こ)、熬子(いり^こ)、海鼠腸(このわた)

b 蚕(かい^こ)、桑子(くわ^こ) * 飼^こひ蚕

* たらちねの母が養ふ蚕の^{まよこも}繭^こ隠りいぶせくもあるか妹に逢はずして

(万葉集 巻12 - 2991)

c 茸(きの^こ)、筍(たけの^こ)

d 鳥の子(とりの^こ)、卵(たま^こ) * 玉子(たまご)

e 眼(まな^こ) * 目^まな子

「ねこ」の語源

- ・諸説あり。よく寝るから(寝子)、寝るを好むから、ニコ(似虎)の転など
- ・鳴き声説が有力。

* 猫のかしづきをして、撫で養ひたまふ。……端近く寄り臥したまへるに、来て、ねうねう、といとらうたげになれば、(源氏物語 若菜下)

* ベこ(牛。ベーベー)、ねこ(ねうねう)、からず、すずめ

* 「猫」という漢字の字音「メウ」(呉音)も鳴き声に基づく。

2. 導入2 (さけのさかな)

* 「さかな」の漢字表記

ア、魚

イ、肴

- ・「な」は本来おかず（副食物）のこと。魚、肉、野菜など、すべて「な」。
- ・「さかな」は「さか（酒）＋な（副食物）」。魚は、美称の「ま（真）」を付けて「まな」ともいう。「まないた」「まなばし」
 - * 「魚を料るを魚板、野菜を切るを菜板といふべし。しかるに、今江戸の俗、いづれをもまな板といへり」（野乃舎随筆）文政3年（1820）
- ・魚は「うを」といった。魚を「さかな」と言うようになるのは江戸時代から。
- ・ナマの魚を「うお」、調理した魚を「さかな」といって区別する地方もある。

【語源を考える上で必要なこと】

漢字表記にはとらわれない。

できるだけ古い時代の語形・語義にさかのぼって考える。

歴史的仮名遣い（旧かな）で考える。

奈良時代以前の語は、上代特殊仮名遣にも留意する。

ローマ字で考えてみる。

同種・同類の例を探してみる。

3. 露出形と被覆形

【単独だと工段、熟語になるとア段】

つめ（爪）	つまさき（爪先）	つまづく（爪突く）
	つまはじき（爪弾き）	つまびき（爪弾き）
	つまむ（摘む）	つまようじ（爪楊枝）
さけ（酒）	さかぐら（酒蔵）	さかだる（酒樽）
	さかづき（酒盃）	さかな（肴）
	さかば（酒場）	さかもり（酒盛り）
	さかや（酒屋）	
あめ（雨）	あまおと（雨音）	あまがえる（雨蛙）
	あまがさ（雨傘）	あまぐ（雨具）
	あまごい（雨乞い）	あまだれ（雨垂れ）
	あまど（雨戸）	あまもり（雨漏り）
かね（金）	かなあみ（金網）	かながた（金型）
	かなぐ（金具）	かなしばり（金縛り）
	かなづち（金槌）	かなぼう（金棒）
	かなもの（金物）	

いね（稲）	いなご（蝗）	いなづま（稲妻）
	いなば（稲葉）	いなほ（稲穂）
ふね（船）	ふなぞこ（船底）	ふなばた（船端）
め（目）	まつげ（目つ毛）	まなこ（目な子）
	まなざし（目な差し）	まなじり（目な尻）
	まばたき（目叩き）	まばゆい（目映い）
	まぶた（目蓋）	まへ（前／ま（目）＋へ（方））

【単独だとイ段、熟語になるとオ段】

き（木）	こかげ（木陰）	こがらし（木枯）
	こぐち（木口）	こずえ（木末）
	こだち（木立）	こだま（木霊）
	こっば（木端）	このは（木の葉）
	こもれび（木漏れ日）	
ひ（火）	ほづつ（火筒）	ほてる（火照る）
	ほなか（火中）	ほのほ（炎／火の穂）

* 「穂」は「秀」。稲穂、波の穂、槍の穂先、伊香保、穂高

4. 動詞・形容詞と名詞

動詞の連用形からできた名詞

- ・編む 網 歌う 謡 かぶく 歌舞伎 暮らす 暮らし 恋ふ 恋
- さぶらふ さぶらひ（侍） 散る 塵 掘る 堀 光る 光
- ・「あおぐ」と「扇」 あふぐ（扇ぐ） あふぎ（扇）

動詞の未然形からできた名詞

- ・つく（築） つか（塚） なふ（絢） なは（縄）

名詞からできた動詞

- ・料理 料る 羽織 羽織る

形容詞からできた名詞

- ・あまし（甘） あめ（飴） あかし（赤し） あけ（朱）
- たかし（高） たけ（岳）・たけ（竹）

5. 単語家族の例

いき（息）、いきる（生きる）、いこふ（憩ふ）、なげき（嘆き／長＋息）
 おと（弟・乙）、おとうと（弟。おとひと）、おとす（落）、おとる（劣）、
 おとろへ（衰）

* 「乙女」は「をとめ」なので、これとは別。「をとこ（男）」の「をと」と同じく、「年若い」の意。

いかめし（厳）、いかづち（雷）、いかる（怒）、いかほ〔地名〕
 みづ（水）、みなかみ（水な上）、みなと（港／水な門）、

みなもと（源 / 水な元）、いづみ（泉 / 出づ水）
いたし（痛し）、いたむ（痛む）、いたはし（労）、いたはる（労）

6 . 頭子音 S の有無のペア

死ぬ（ナ変） s i n u
去ぬ（ナ変） i n u
咲く（四段） s a k u
開く（四段） a k u
据ゑ（下二段） s u w e
植ゑ（下二段） u w e
棄つ（下二段） s u t u
うつ（下二段） u t u
薩摩 s a t u m a
あづま a d u m a

7 . 撥音化して次の音が濁音になった例

- ・ すみすり（墨磨り）——→~~ス~~ズリ）——→ すずり（硯）
- ・ ふみて（文手）——→~~フ~~ンデ）——→ ふで（筆）
- ・ のみと（飲み門）——→~~ノ~~ンド）——→ のど（喉）
- ・ かへるて（蛙手）——→~~カ~~ヘンデ）——→ かへで（楓）

8 . 色の名前

古代の基本色は「あか」「くろ」「しろ」「あを」の四色。

- ・ 赤・黒は明暗。「あか」は「明し」、「くろ」は「暗し」
- ・ 白・青は顕漠か。「しろ」は「いちしろし」(著)、「あを」は未詳。あるいは「藍(あゐ)」と同語源か。
- ・ 形容詞になるのはこの4色のみ。

植物に由来する色名が多い。

- ・ あかね（赤根）、あさぎ（浅葱）、あゐ（藍）、くれなゐ（呉の藍）、むらさき（紫 / 群咲き）、やまぶき（山吹）
- 「みどり」は、本来は「萌え出たばかりの若葉」の意。

9 . 数の名前

三（m i）・六（m u）
四（y o）・八（y a） * いよいよ、いやさか

10 . 漢語起源の言葉

- ・ 銭（セン ぜに）、馬（マ むま）、梅（メイ むめ）、鬼（オン（隠） おに）、縁（エン えにし）

1 1 . 女房言葉

語の下部を省略し、上に「お」を付ける

- ・かき餅 → お + かき (もち) → おかき
- ・(副食物の)数物 → お + かず (もの) → おかず
- ・強飯 → お + こは (いひ) → おこは
- ・田楽 → お + でん (がく) → おでん
- ・冷し → お + ひや (し) → おひや

語の下部を省略し、下に「もじ」を付ける

- ・髪 (かみ) → かもじ
- ・杓子 (しゃくし) → しゃもじ
- ・そなた → そもじ
- ・目通り、目見え → めもじ
- ・湯帷子、湯巻き → ゆもじ

語の最初の音を繰り返す (その上に「お」を付けることもある)

- ・酒 → ささ
- ・かつをぶし → おかか

1 2 . 地名表記 (近江・上野について)

「近江」はどうして「おうみ」と訓むのか? 「おうみ」の意味は?

- ・「うみ」という語は、海水の海だけでなく、淡水のうみ (湖) も含んだ。
- ・淡水の「うみ」を指す語には、「みづうみ (水海)」または「あはうみ (淡海)」がある。海水の「うみ」は「しほうみ (塩海)」。
- ・現在の滋賀県は、日本最大の湖である琵琶湖があるので、淡海国といった。よみは「あはうみ」「あふみ」。
- ・現在の静岡県西部は浜名湖があるので、「遠淡海 (とほつあふみ)」の国といった。今の滋賀県は「近淡海 (ちかつあふみ)」の国。遠近は都から見て。
- ・大宝元年 (701) 頃、国名は漢字二字と定められた。「近淡海」「遠淡海」はともに漢字三字なので、「淡海」を「江」と置き換え、「近江」「遠江」と改めた。よみは従来通り、「ちかつあふみ」「とほつあふみ」のまま。
- ・両国を区別するのに、遠江を「とほつあふみ」といえば、近江をあえて「ちかつあふみ」という必要はなく、単に「あふみ」というようになった。

「上野」はどうして「こうづけ」と訓むのか? 「こうづけ」の意味は?

- ・現在の群馬県・栃木県は、古くは「毛野国 (けののくに)」といった。
- ・この国を二つに分け、「上毛野 (かみつけの)」「下毛野 (しもつけの)」と呼んだ。都に近い方が「上」、遠い方が「下」。
- ・この両国名は、漢字二文字の折、中間の「毛」の字を切り捨てて、「上野」「下野」とした。よみは従来通り「かみつけの」「しもつけの」のまま。
- ・やがて、時代が下るにつれて、「かみつけの」「かみつけ」「かんづけ」「かうづけ」「こうづけ」と変化していった。